



- ◀ 学びのスタイル語る 4  
(京大教授の鎌田浩毅さん)
- 50自由形 初の20秒台 2
- 文三襲名 桂つく枝 13
- 女兒閉め出し 居酒屋 15

# 読売新聞

## ユニーク講義が大人気の京大教授 鎌田浩毅さん

### 学びのスタイルを語る

菊政哲也撮影

毎回、「地球科学」の授業の初めに、習う内容と関係なくともOK、と言って学生に紙を配ると、もう様々な質問が来ます。

「違う学部の子を好きになりました。彼女と話すには？」

回答は、違う学部だから自分とは興味が違う。どんなことを話題にしているのか、どんな授業に出ているのか、とデータを取る。それから授業のときに隣に座って……という感じです。

講義は、質問に答えるQ&A、火山活動の映像紹介、教科書の中身と、90分を15分ごとに切り替えています。中でも重視しているのが、Q&Aの時間。勉強の方法から私の服装の感想まで学生は書いてくる。

なぜ、「地球科学」の授業でこんなことをしているのか。

かまた・ひろき 京都大人間・環境学研究科教授。専門は火山学。恋人の作り方から人生論まで飛び出す「おもしろ講義」が評判になり、多くのテレビ出演や講演をこなす。趣味は、おしゃべり、ピアノなど。著書は「ブリッジマンの技術」(講談社現代新書)、「マグマの地球科学」(中公新書)など。最新刊は「一生モノの勉強法 京大理系人気教授の戦略とノウハウ」(東洋経済新報社)。53歳。

# 相手の関心に関心持つ



1997年に京大に来た、研究発表のような授業をしていたら、非常に受けが悪い。高校で地学を勉強した学生はとも少くない。白衣を着てばさばさ頭の先生が、英語の専門用語まじ

りの授業を90分やったら、理解度を超えるわけです。「これは、いかん」と思い、がらりと変えたのは2001年から。学生の気持ちを考え、双方向性の実現を目指しました。ただ教え



火山学や地球科学は役に立つ学問ですが、市民とのコミュニケーションが取れないと完成しない学問なのです。冒頭、例にあげた「恋人

「教わる」から「自発的な学び」への転換です。

## 「教わる」から「自発的」へ

「知識は自分で身につける」が答えです。私が目指すのは、教育のスーパー・プロフェッサー。学生の学ぶ意欲を引き出し、こんな本があつて道具が利用できるよ、といった知識への到達手段を伝えるのが仕事だと考えています。入り口は教えるから、その先は自分でどんどん学んでいってほしい、ということ。

ある海岸で、「津波が来たらどうする？」と聞かれたサーファーの女の子が「サーフボードで波乗りして逃げる」なんて答えている。専門家は津波の恐ろしさを知っていますが、この女の子を救えなくてはならない。

「知は力なり」という言葉があります。でも、知識ある人は自分がその力を持つていないことを知らないことが多い。自分の地位を上げるためだけに使っている場合もある。

本日は、学ぶことは面白い、生きた瞬間なのです。それによって自分を高め、さらに身に付けた知識をみんなに伝えていく。これが、社会から必要とされる姿だと思います。

聞き手 宇川聡